



地域に密着して開発した
新たな教育プログラム

53.3% という現実

すべての交通参加者が、安全で事故に遭わない社会を実現するために

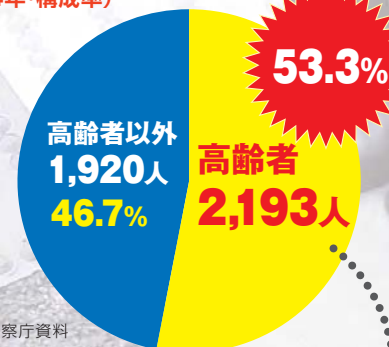
contents

Hondaの安全運転普及活動報告書 2015

特集:地域に密着して開発した新たな教育プログラム	2
ごあいさつ	6
2015年3ヶ年計画 2年目の振り返り	8
教育ソフトウェアの開発と導入	10
普及活動の変革と進化	12
海外における二輪事故低減の実現	22
資料編	23
●安全運転普及活動 この1年の歩み	
●2015年安全運転普及活動動員数	
●安全運転普及活動一覧	
●安全運転・交通安全教育に関する情報や教材のホームページ公開	
●安全運転教育機器のご案内	
●第2回「交通安全動画・ポスター」コンテスト受賞作品	
安全運転普及活動拠点	27

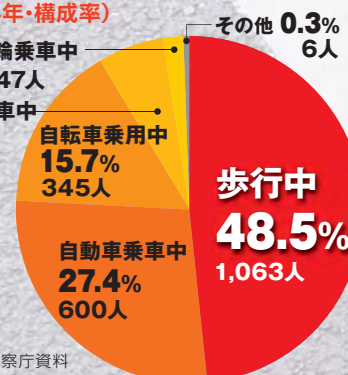
数字から見る高齢者の交通事故

高齢者(65歳以上)の交通事故死者数
(2014年・構成率)



※出典:警察庁資料

高齢者(65歳以上)の状態別・交通事故死者数
(2014年・構成率)



※出典:警察庁資料

1970年に運転者教育からスタートした私たちの活動は現在、運転者だけでなく交通社会に参加するすべての人を対象とした活動へと広がっています。

それは、クルマやバイクに乗っている人だけでなく、道を使うだれもが安全でいられる「事故に遭わない社会」をつくりたいと考えているからです。

交通事故死者数は1970年のピーク時からおよそ4分の1に減少していますが高齢者(65歳以上)の割合はこの3年間は50%を超えており、2014年は交通事故死者数の53.3%を占めるに至りました。

Hondaではかねてから高齢者に焦点を当てた交通安全教育プログラムの開発と普及に取り組んでおりますが、今年は歩行中の事故防止を目的とした新たな教育プログラムの開発を完了しました。高齢者の交通事故死者の中で、歩行中が最も多く、地域の指導者の方々からも新たな教育手法への期待が寄せられていました。

この開発の過程で、私たちが常に意識していたのは「現場」です。実際の交通安全の教育現場で尽力される皆様の声に耳を傾け、協力し合い、プログラムの開発を進めました。

Hondaの交通安全教育のノウハウ



「あやとりい 長寿編」の開発を担当した相浦和則
元・本田技研工業(株)安全運転普及本部
(現:三重県警察交通安全教育技能指導員)



Hondaならではの先進性・独自性と 地域の指導者が使いやすく、 受講する高齢者が納得できるものをめざす

高齢歩行者向け交通安全教育プログラムの 先駆けとなった「あやとりい 長寿編」

安全運転普及本部(以下、安運本部)が、最初に高齢歩行者向けの交通安全教育プログラム「あやとりい」[※]「長寿編」を開発したのは2004年。きっかけは、三重県鈴鹿市内で高齢歩行者が被害者となる交通事故が増え始めたことでした。鈴鹿市から、こうした事故を防ぐための教育手法が求められたのです。当時、安運本部で「あやとりい 長寿編」の開発を担当した相浦和則は「高齢歩行者に対する啓発パンフレット等はありませんでしたが、どのような教育を行えばいいかという情報はほとんどありませんでした。そこで、交通指導員の方々の参考になるマニュアルのようなものをつくれれば、鈴鹿市だけでなく、全国的にも高齢歩行者への教育が活発に行われるのではないかと思います」と振り返ります。

相浦はすぐに「あやとりい 長寿編」の原型となる指導マニュアルを作成。そして、「実際の現場で使ってみなければわからないし、鈴鹿市以外でも受け入れられるものにした」と三重県、岐阜県、静岡県などの交通指導員の方々にマニュアルに沿って、各県の高齢者に交通安全教育を実施してもらいました。すると、多くの方から「こ

れをもとに勉強すれば、高齢者にわかりやすい指導ができる」という反響があったのです。マニュアルの完成をめざし、相浦は「あやとりい 長寿編」の重点指導項目を「歩く」「止まる」「よく観る・聞く」「まっすぐ渡る」と絞り込みます。さらに、高齢者が気楽に参加できる内容にする、文字情報は必要最低限にする、準備にもあまり時間がかからないようにすることにもこだわりました。こうして完成した「あやとりい 長寿編」は、全国各地の交通指導員の方々に活用されています。このように、実際の現場に何度も足を運び、指導されている方の声を聞き、プログラムの開発を行ったのです。

道路横断中に潜む危険を 高齢者に気づいていただくために

それから10年後の2014年、安運本部は高齢歩行者向けの新たな教育プログラムの開発に着手しました。近年、交通事故死者数に占める高齢歩行者の割合が高まっていることから、以前にも増して高齢者の歩行中の事故防止への注目が集まっています。(公財)交通事故総合分析センターの資料によると、高齢者が単路で横断歩道以外を横断中に死傷したケースでは死者数、負傷者数ともに横断前半よりも横断後半の構成率が高くなっています。「あやとりい 長寿編」では、歩行時や自転車乗用時など様々な状況に合わせた学習内容としましたが、今回制作したプログラムで

地域の指導者の知識と経験



高齢歩行者向けの教育プログラム 「“安全な道路の渡り方について” 交通安全教室」を活用した指導者の声



滝沢市 市民環境部防災防犯課
交通安全教育専門員
北川郁子さん

参加者の反応が良かったので、高齢者の方にも目から入ってくる情報は説得力があると感じました。このプログラムは、自分たちで内容をアレンジすることができるので使いやすいと思います。



(一財)長野県交通安全教育支援センター
主任指導員
梶田さな恵さん

道路横断シミュレーションなどの臨場感のある映像を使用するのは、指導する上でたいへん有効です。パソコンとプロジェクターがあれば簡単にできますので、このプログラムを取り入れていきます。

は、横断後半に左側から来るクルマとの事故を防ぐための内容に絞り、安全行動を高齢者に理解してもらうことをテーマとしました。そして、ここでも現場の意見や要望をヒアリングするために、全国各地の交通指導員の方々に集まっていただき、「教材研究会」を開催しました。Hondaのノウハウに、現場で活躍する地域の指導者の知識と経験を組み合わせることで、より良いプログラムができると考えます。「教材研究会」で得た意見や要望をもとに、事故にいたる過程を歩行者とドライバー、それぞれの目線で再現する映像にし、道路横断中に潜む危険を高齢者に気づいていただく参加体験型の内容としました。さらに、道路横断シミュレーションによって意識と行動のミスマッチを理解していただくという独自の工夫を加えました。

開発の途中段階で、こうした内容に対して交通指導員の方々からアドバイスをいただく機会を設けたり、交通指導員の方々による



現場での試行も実施しました。試行に参加した高齢者の方は「ドライバー目線の映像を見て、歩行者は見落とされやすいことが理解できました。今後は、クルマが完全にいなくなってから渡るようにしたい」と話しています。そして今年11月、「安全な道路の渡り方について」交通安全教室として完成しました。これを全国各地の交通安全教育の現場に普及させ、高齢歩行者が被害者となる事故を1件でも減らしていきたいと考えています。

今、安運本部は高齢歩行者と同様の手法で、幼児・児童向け教育プログラムの開発を進めています。今後も、地域の指導者の声に耳を傾け、現場の実態を踏まえた、Hondaらしい先進性・独自性のある教育プログラムの開発に取り組んでいきます。

“安全な道路の渡り方について”交通安全教室

プログラム(DVD)には、以下の4つのポイントを高齢者に理解してもらうための映像や画像(図、イラスト)が収録されています。

- ①クルマが通り過ぎても渡らず、左側からクルマが近づいていないか確認する。
- ②近くを見ると遠くのものが見えなくなるので、体全体(目とへそ)で安全確認する。
- ③道路横断時は、センターライン(道路の中央付近)手前でクルマが近づいていないか、もう一度確認する。
- ④夜間は反射材を着用し、クルマのライトが見えたら待つ。

●プログラムの流れ(昼間編の場合)

	時間	内容
導入	5分	プログラムの目的を理解してもらう。
高齢者の交通事故の特徴	10分	高齢者の道路横断中の事故の特徴を提示し、どんな行動が危険かを考えてもらう。
映像による体験	5分	歩行者目線とドライバー目線の映像を見せ、道路横断中に潜む危険に気づいてもらう。代表者に道路横断シミュレーションを体験してもらう。
まとめ	10分	「思い込み」の危険に気づいてもらい、安全な横断方法を理解してもらう。

開発が進む、幼児・児童向け 教育プログラム

幼児・児童を対象とした新たな教育プログラムは、楽しく交通安全を学んでほしいという想いのもと、「あやとりい ひよこ編」で交通ルールを習得した子どもの次のプログラムと位置づけ、開発を進めています。